

本学における初年次リメディアル学習指導報告

尾崎秀夫 樋口勝一 平田淳子

1. 序論

大学生の基礎学力低下が指摘される昨今 [1]、この問題を解決するために各大学や学会 [2]でさまざまな工夫が試みられている。中央審議会答申[3]においてもリメディアル教育の必要性が謳われている。そこで、本学では、平成 22 年度より、1 年次生必修科目「基礎演習Ⅰ」、「基礎演習Ⅱ」においてリメディアル教育をおこなうことになった。

2. 実施方法

上記科目において、授業時間 90 分を 2 つに分け、前半 45 分をリメディアル学習に、後半 45 分をスタディ・アカデミックスキル習得に当てる。後半の 45 分については、大阪国際大学の先生方によって作成された市販教材「大学学びのことはじめ」（ナカニシヤ出版）を利用することにして、今回は、前半のリメディアル学習のプログラム開発に力を注いだ。プログラムの目標は、教員の独自性に頼ることなく、システマティックに、基礎学力（リメディアル学習）を習得できることである。そのため、

1. 内容・テキスト・進度を統一し、授業方法をマニュアル化する。
2. 専門分野外の教員でも教えられるオリジナルリメディアル学習教材（以下、テキスト）を作成する。
3. テキストは、「言語」、「社会」、「教的」の 3 分野から構成され、その内容には、「文法（国文法・英文法）」や、「一般常識」が含まれている。
4. 能力別クラス編成をおこない、それに応じたテキストがオンデマンドで作成される。

5. テキストに対応した前回学習分の復習テストとポイント解説を毎回おこなう。

以下、プログラムの詳細である。

学生は入学式の後、テキストをもとに作成される 3 分野の内容を含んだプレースメントテストを受験する。その結果をもとに、分野毎に「基礎」と「応用」の 2 クラスに分ける。また、テキストもクラス分けに応じて個々にオンデマンド作成される。なお、著者らによって独自に作成されたのであるが、言語分野の一部の問題は出版社である育伸社から提供された。育伸社は学校・塾専用教材の出版社で小学校から高校までの多くの内容の蓄積があり、教員が必要な分野を選択して教材を印刷するオンデマンド出版の対応をおこなっている。

前半 45 分では、基礎演習Ⅰにおいて、各分野 4 回ずつ、合計 12 回のリメディアル学習をおこなう。13 回目以降は、確認テスト（確テ）をおこない、学生は、合格までテストを受け続けなければならないとした（表 1）。

45 分の授業方法については、1 回 45 分をさらに 2 つに分け、その前半 20 分を前回の復習テスト（復テ）と前回内容解説、その後半 25 分を本日の新しい内容学習と問題演習とすることで、学生は同じ内容を 2 回学習できるスパイラル方式を取り入れた（図 1）。この方式は、他の授業で取り入れ、アンケート調査の結果、学生への内容定着と授業を休んだフォローがおこなえるため、内容を理解せずに授業を受ける人を出さないことに有効であることが確認されている。

基礎演習Ⅱにおいても同様に実施される。

なお、このリメディアル学習は、2名の教員によって担当され、それぞれが全3分野を担当する(表2)。そのため、テキストなど教材一式は、専門分野外の教員でも教えることができるよう工夫されている。

テキストの体裁は、1回1内容見開き2ページで完結というスタイルである。左半分が例題やポイント、右半分が練習問題となっている(図2)。

各分野の内容を以下に示す。

1. 言語分野

- ・単語・文節・品詞①
- ・英語の品詞
- ・敬語
- ・キーセンテンス
- ・品詞②
- ・文の書き換え
- ・指示語
- ・ことわざ・慣用句

2. 社会分野

- ・政治(1)
- ・地理(1)
- ・経済(1)
- ・日本史(1)
- ・政治(2)
- ・地理(2)
- ・経済(2)
- ・日本史(2)

3. 数的分野

- ・計算
- ・□率など
- ・式の変形
- ・速さ・濃度
- ・割合
- ・表計算
- ・方程式
- ・単位

このような方法で現在、本学におけるリメディアル教育は春学期の「基礎演習Ⅰ」を終えたところである。その中で、

- ・社会分野教材の情報更新の難しさ
- ・手作業での運営の煩雑さ

という問題点が生じている。今後の課題としたい。

表1. リメディアル学習進行表

基礎演習Ⅰ

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|------|-----|-----|------|------|------|-----|------|------|------|
| | 4/13 | 4/20 | 4/27 | 5/11 | 5/18 | 5/25 | 6/1 | 6/8 | 6/15 | 6/22 | 6/29 | 7/6 | 7/13 | 7/20 | 7/27 |
| 前 | ① | 言2 | 言3 | 言4 | 社1 | 社2 | 社3 | 社4 | 数1 | 数2 | 数3 | 数4 | 確1 | 確2 | 確3 |
| 後 | 言1 | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦予 | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | ⑬ | ⑭予 | ⑮ |

基礎演習Ⅱ

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|------|------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|-------|-------|------|------|-----|
| | 9/28 | 10/5 | 10/12 | 10/19 | 10/26 | 11/2 | 11/9 | 11/16 | 11/30 | 12/7 | 12/14 | 12/21 | 1/11 | 1/18 | 2/1 |
| 前 | 言5 | 言6 | 言7 | 言8 | 社5 | 社6 | 社7 | 社8 | 数5 | 数6 | 数7 | 数8 | 確1 | 確2 | 確3 |
| 後 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦予 | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | ⑬予 | ⑭ | ⑮ |

※確1～3は確認テスト、言は言語分野、社は社会分野、数は数的分野を表す。

表2. リメディアル学習担当者

| | | | |
|----|------|------|------|
| | 言語分野 | 社会分野 | 数的分野 |
| 基礎 | 教員A | 教員A | 教員B |
| 応用 | 教員B | 教員B | 教員A |

図1. スパイラル学習

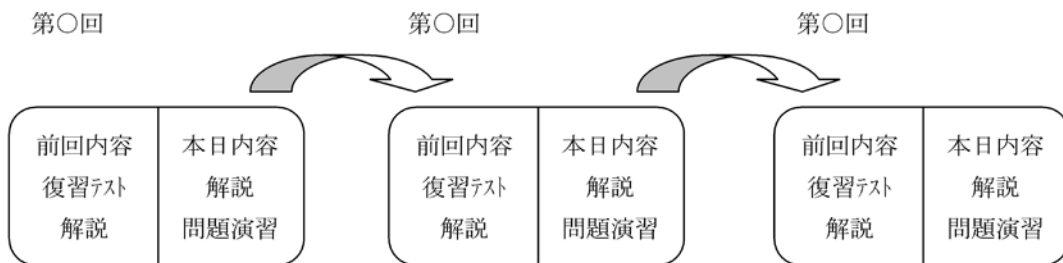


図2. テキスト体裁

| | |
|---|--------------|
| <p>Lesson 3 数的基礎③ □率</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポイント解説 ・例題 | <p>□確認問題</p> |
|---|--------------|

3. アンケート調査結果

春学期「基礎演習Ⅰ」の最終回の授業が終わった後に、受講者全員に対してアンケート調査をおこなった。

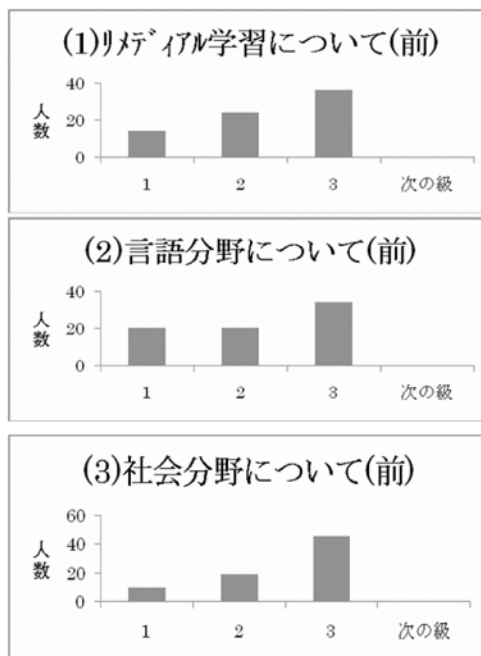
設問内容は、授業開始前と授業の終了後で、

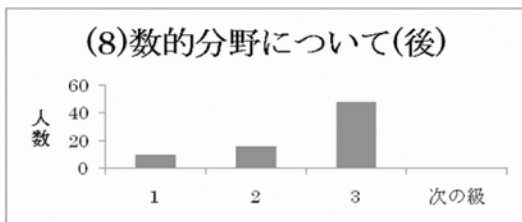
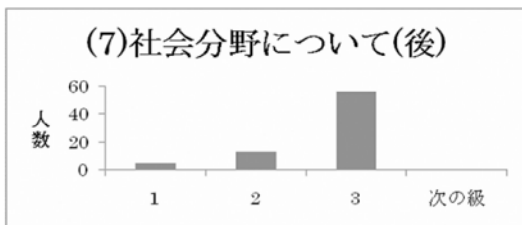
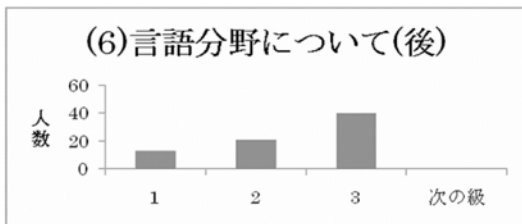
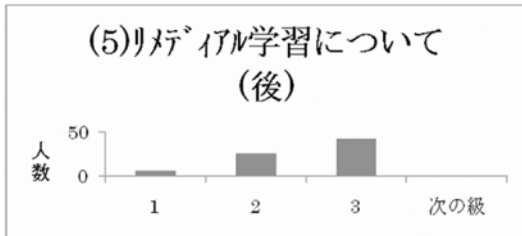
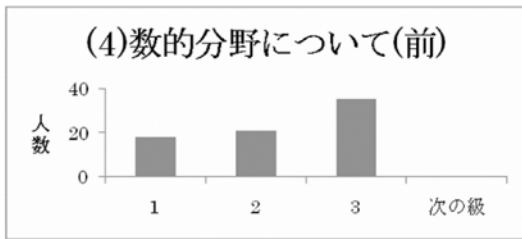
- ・全体のリメディアル学習について
 - ・言語分野のリメディアル学習について
 - ・社会分野のリメディアル学習について
 - ・数的分野のリメディアル学習について
- どう思うかということである。そして、

1. 必要ない
2. どちらともいえない
3. 必要である

で答えてもらった。

以下、結果をグラフで示す。





授業前において、半数の学生がリメディアル学習の必要性を感じていた。中でも社会分野については61%と他の分野（言語46%、数的47%）と比較してはるかに高い割合となった。今回、本学のリメディアル学習の特徴として、「社会」分野を取り入れたことがあった。今回の提案が学生の需要にマッチしていることが確認できた。

また、授業終了後においては、

- ・全体 49%→57%
- ・言語 46%→54%
- ・社会 61%→76%
- ・数的 47%→65%

のように、すべての設問において、リメディアル学習の必要性を感じている学生の割合が増加した。もともと多くの学生に必要だと考えられていた社会分野は76%の学生が必要だと感じるようになったのは当然として、顕著であるのは数的分野の増加である。これは、文学系の学生が実際に、小中学校レベルの算数・数学を復習してみて、内容について忘れていた又は習得できていないことを自覚したことが原因だと考えられる。

4. まとめ

今回の報告は、年度途中ということで速報として簡単な報告にとどまった。今後、秋学期の結果や、成績との相関など、詳細を検討していく予定である。

参考文献

- [1]西村和雄他編(1999), 分数ができない大学生, 東洋経済新報社
福井有(2006), 大学とガバナビリティー, 学法新書
- [2]日本ビジネス実務学会ホームページ
初年次教育学会ホームページ
日本リメディアル教育学会ホームページ
- [3]平成20年12月「学士課程教育の構築に向けて」中教審答